

令和7年度

# 運営に関する計画 【中間評価】

大阪市立瓜破西中学校

令和7年11月

(様式1)

## 大阪市立瓜破西中学校 令和7年度 運営に関する計画・自己評価(総括シート)

※はじめに

令和5年度に、令和4年度から7年度までの中期目標を変更し、概ね令和5年度から7年度までの目標として設定しています。

### 1. 学校運営の中期目標

#### 現状と課題

学校全体としては落ち着いた状態で日々の教育活動を展開できている。教職員も授業研究に余念がなく、行事や特別活動の取り組みに対しても熱心である。また、生徒対応だけでなく、家庭訪問等の保護者対応にも日々努めている。ただし、次の点においては、本校の課題であると考えている。

- ア) 一部に、日常的な校則違反をする生徒や生活リズムが崩れている生徒がみられる。保護者の協力も得にくく、指導を繰り返すものの、あまり効果がなく、改善の見通しが立てられない。
- イ) 不登校生徒が多く、対応に苦慮している。令和6年度の年間 30 日以上の欠席者は、1 年18名, 2 年20名, 3 年20名の合計58名であり、全校生徒の 16.6%に達している。
- ウ) 各種テストにおける得点力に多くの課題がみられる。令和6年度の全国学力・学習状況調査(3年生のみ対象)、大阪府チャレンジテスト(チャレンジテスト plus も含む)の結果は以下の通りである。

#### ◆全国学力・学習状況調査(3年生のみ対象)

	全国	市	本校
国語	58.1	56	53
数学	52.5	51	49

#### ◆チャレンジテスト(1年の理社はチャレンジテストplus)

	1 年		2 年		3 年	
	府(市)	本校	府	本校	府	本校
国語	58.5	57.0	65.5	59.1	65.2	61.9
社会	53.7	52.5	49.5	48.2	50.4	42.4
数学	49.8	45.2	50.7	46.6	49.1	50.4
理科	55.6	50.4	47.2	50.0	52.4	47.0
英語	61.5	55.7	54.0	45.4	53.6	50.8

エ) 校内体制として、生徒が主体的に取り組める活動が少ないことが以前からの課題であったが、この数年の教員の努力で、徐々にそういった活動が増えている。“指示を受けてから動く”のではなく、“自ら考えて動く・判断する”といった生徒を増やしていく必要がある。

オ) PTAとの連携は、以前と比べると活発とまでは言い難い。少なからずコロナの影響もあって、どちらかといえば縮小される傾向にあると思われる。

## 中期目標

### 【安全・安心な教育の推進】

◎不登校生徒の減少をめざし、令和7年度末には6%未満までとする。

### 【未来を切り拓く学力・体力の向上】

◎学力向上をめざし、令和7年度には【全国学力学習状況調査】における各教科の得点を全国と、【チャレンジテスト】では各教科の得点を大阪府と、【チャレンジテスト plus】では各教科の得点を大阪市と、同じレベルにする。

### 【学びを支える教育環境の充実】

◎各教科の授業において、ICT機器を活用した授業を令和7年度には年間80%以上にする。

◎「教員の時間外勤務時間の状況について」中、「3 貴校教員の時間外勤務時間上限基準の達成率」の「基準1」を、令和7年度1月度には45%以上にする。

## 2. 中期目標の達成に向けた年度目標

### 【安全・安心な教育の推進】

◎年度末の校内調査における「学校に行くのは楽しいと思いますか」に対して、肯定的に回答する生徒の割合を75%以上にする。

◎年度末の校内調査における「自分には、よいところがあると思いますか」に対して、肯定的に回答する生徒の割合を80%以上にする。

### 【未来を切り拓く学力・体力の向上】

◎中学生チャレンジテストにおける国語の学力に課題の見られる生徒の割合を、同一母集団において経年的に比較し、いずれの学年も前年度より1ポイント減少させる。

◎中学生チャレンジテストにおける数学の学力に課題の見られる生徒の割合を、同一母集団において経年的に比較し、いずれの学年も前年度より1ポイント減少させる。

### 【学びを支える教育環境の充実】

◎授業日において、生徒の8割以上が学習者用端末を活用した日数が、年間授業日の50%以上にする。〔ただし、事務局が定める学校行事等で端末の活用が適さない日を除く〕

◎年次休暇を10日以上取得する教職員の割合を60%以上にする。

### 3. 本年度の自己評価結果の総括

※最終評価にて総括する。

(様式2)

## 大阪府立瓜破西中学校 令和7年度運営に関する計画・自己評価(目標別シート)

評価基準	A: 目標を上回って達成した	B: 目標どおりに達成した
	C: 取り組んだが目標を達成できなかった	D: ほとんど取り組めず目標も達成できなかった

年度目標	達成状況
<b>【安全・安心な教育の推進】</b> ◎年度末の校内調査における「学校に行くのは楽しいと思いますか」に対して、肯定的に回答する生徒の割合を75%以上にする。 ◎年度末の校内調査における「自分には、よいところがあると思いますか」に対して、肯定的に回答する生徒の割合を80%以上にする。	

年度目標の達成に向けた取組内容、取組の進捗状況を測る指標	進捗状況
<b>取組内容①【1 安全・安心な教育環境の実現】</b> ◎カウンセリングマインドに基づいた生徒対応を実践する。	B
<b>取組内容②【1 安全・安心な教育環境の実現】</b> ◎生徒自らが発案計画実践できる取り組みを計画する。	B
<b>取組内容③【1 安全・安心な教育環境の実現】</b> ◎「今週のできごと」を継続実施する。	B
<b>《①②③の共通指標》</b> 1か月の欠席者及び保健室来室者数(心因性)を昨年度の同月より減少させる。	B

年度目標の達成状況や取組の進捗状況の結果と分析
<p>※校内調査(学校評価アンケート)は12月に実施予定であるため、現時点では達成状況を述べるできない。ここでは、校内調査(学校評価アンケート)以外の部分についての進捗状況と分析を述べることとする。</p> <p>・昨年度と同様、常日頃から担任だけでなく多くの教員で生徒の様子を見守り、生徒の声を丁寧に聞き取って対応することを心がけている。</p> <p>・毎週末の振り返りシート「今週のできごと」、毎日の「心の天気」、1人1台端末の「相談機能」など、生徒がSOSを発信するさまざまな機会を大切にして、トラブルの早期発見に努めている。</p> <p>・保健室の(心因性による)来室者数は、4月は減少したものの、5月から9月まではどの月も昨年度の同月より増えてしまっている。数字だけを見れば悪化しているといえるが、生徒が教員に気持ちを訴えに来ている(教員に話を聞いてもらいたがっている)と解釈することもできるので、生徒の声に耳を傾ける姿勢は継続させたうえで、保健室に来室した生徒の様子を見極めていく必要がある。</p>

・欠席者数を月ごとに見ると、4月から9月までどの月も大幅に減少している。母集団が昨年度と変わっているので単純には比較できないが、生徒の声を丁寧に聞き取る姿勢や、今年度より開始したサポートルームの取組が一定の成果をあげているとも考えられる。継続して取り組んでいきたい。

・生徒が主体となる活動は、生徒会による活動が中心となるが、朝の挨拶活動(アイカツ)などは生徒会役員以外にも、たくさんの生徒が参加して活動を大いに盛り上げることができた。

・3年生の修学旅行では、修学旅行実行委員会の生徒たちが主体となって、修学旅行のルールを決めたり、学年レクリエーションを企画運営したりするなど、修学旅行の成功に向けて積極的に活動した。

・昨年度は、主体的に活動する生徒が限定的である点が課題であったが、今年度は多くの生徒に呼びかけることで参加者が増えている。引き続き、全校生徒を巻き込んだ活動が展開できるよう努めていきたい。

#### 次年度への改善点

※最終評価にて総括する。

(様式2)

## 大阪市立瓜破西中学校 令和7年度運営に関する計画・自己評価(目標別シート)

評価基準	A : 目標を上回って達成した	B : 目標どおりに達成した
	C : 取り組んだが目標を達成できなかった	D : ほとんど取り組めず目標も達成できなかった

年度目標	達成状況
<b>【未来を切り拓く学力・体力の向上】</b> ◎中学生チャレンジテストにおける国語の学力に課題の見られる生徒の割合を、同一母集団において経年的に比較し、いずれの学年も前年度より1ポイント減少させる。 ◎中学生チャレンジテストにおける数学の学力に課題の見られる生徒の割合を、同一母集団において経年的に比較し、いずれの学年も前年度より1ポイント減少させる。	

年度目標の達成に向けた取組内容、取組の進捗状況を測る指標	進捗状況
<b>取組内容①【4 誰一人取り残さない学力の向上】</b> ◎国語・数学・英語における習熟度別分割授業を充実させ、全体的な得点力向上を図る。	C
<b>取組内容②【4 誰一人取り残さない学力の向上】</b> ◎全教科を通じて授業の振り返りを授業ごと(单元ごともしくは1教材ごと)に150字程度の作文を書かせることによって、書く力を伸ばす。	B
<b>取組内容③【4 誰一人取り残さない学力の向上】</b> ◎読解力・表現力の向上をめざした授業実践(音読, ペア&グループ学習, プレゼン, 探求型学習)をおこなう。	B
<b>指標:</b> RST(リーディングスキルテスト)を第1学年の初期と第2学年の後期に実施し、その成績を向上させる。	
<b>《①②③の共通指標》</b> ◎中学生チャレンジテストにおける国語の学力に課題の見られる生徒の割合を、同一母集団において経年的に比較し、いずれの学年も前年度より1ポイント減少させる。 ◎中学生チャレンジテストにおける数学の学力に課題の見られる生徒の割合を、同一母集団において経年的に比較し、いずれの学年も前年度より1ポイント減少させる。	

### 年度目標の達成状況や取組の進捗状況の結果と分析

※中学生チャレンジテストは9月に3年生のみ実施されており、1・2年生は1月に実施予定である。そのため、チャレンジテストの結果から分析することができないので、ここでは、それ以外の部分について述べることとする。

・分割授業については、国語・数学・英語でおこなうこととしている。教科によって分割授業をおこなったものもあるが、習熟度別のクラス編成ではなく、単純に2分割して少人数でおこなう分割授業であった。なお、現時点でまだ分割授業をおこなっていない教科でも、今後、取り組む予定である。

・学力向上にむけた取組は、多少の改善や修正を加えながらも、基本的にはすべて昨年度と同じようになっている。特に、音読やグループ学習、プレゼンなどは、生徒同士が互いに学び合うことができる点で、学習効果が期待される。すべての教科で毎時間取り組むわけではないが、教材や単元によって、柔軟な授業展開をおこなっている。

・現時点で結果がわかっているテスト(全国学力・学習状況調査、大阪府チャレンジテスト[3年] ※いずれも第3学年が受験したもの)についていえば、全国平均や大阪府平均との差が縮まってきている。昨年度の校内調査(学校評価アンケート)から、授業に対して前向きな姿勢や、生徒と教員の良好な関係などがうかがえたが、そういったことが実を結びつつあると考えることができる。

・「誰一人取り残さない」という意味では、不登校対策も重要になる。今年度、学校を休みがちな生徒や教室に入りにくい生徒の居場所として、「サポートルーム」を開設した。自学自習が原則であるが、開設以来、毎日3～4名の生徒が利用している。これまでなら「欠席」となっていた生徒が、登校し、各自で課題プリントに取り組むなどして過ごし、給食を食べて帰る。担任と面談することもあり、間違いなく学校生活の中に居場所を見つけている状態であると考ええる。

### 次年度への改善点

※最終評価にて総括する。



(様式2)

## 大阪市立瓜破西中学校 令和7年度運営に関する計画・自己評価(目標別シート)

評価基準 A: 目標を上回って達成した B: 目標どおりに達成した  
C: 取り組んだが目標を達成できなかった D: ほとんど取り組めず目標も達成できなかった

年度目標	達成状況
<b>【学びを支える教育環境の充実】</b> ◎授業日において、生徒の8割以上が学習者用端末を活用した日数が、年間授業日の50%以上にする。〔ただし、事務局が定める学校行事等で端末の活用が適さない日を除く〕 ◎年次休暇を10日以上取得する教職員の割合を60%以上にする。	C

年度目標の達成に向けた取組内容、取組の進捗状況を測る指標	進捗状況
<b>取組内容①【6 教育DX(デジタルトランスフォーメーション)の推進】</b> ◎ICT活用技術の研修会を年間を通じて3回おこなう。 <b>指標:</b> 授業日において、生徒の8割以上が学習者用端末を活用した日数が、年間授業日の50%以上にする。〔ただし、事務局が定める学校行事等で端末の活用が適さない日を除く〕	C
<b>取組内容②【7 人材の確保・育成としなやかな組織づくり】</b> ◎退勤時刻17:30までの教職員用「ゆとりの日」を月に4回確保する。 <b>指標:</b> 年次休暇を10日以上取得する教職員の割合を60%以上にする。	B

年度目標の達成状況や取組の進捗状況の結果と分析
<p>・教員を対象としたICT活用研修は、これまで2回実施した(10月末時点)。3学期に3回目を実施する予定である。</p> <p>・学習者用端末についていえば、「生徒の8割以上が学習者用端末を活用する」ということ自体が現状では達成できていない。平均して7割前後の生徒が端末を毎日活用しているが、8割以上となると、10月末時点では1日も達成できていないのが現状である。現時点から「年間授業日の50%以上にする」という目標を達成することは、現実的には不可能だと思われる。</p> <p>・教職員用「ゆとりの日」は、昨年度と同じく、週に1度のペースで設定している。今年度より、保護者に配付する行事予定表にも「ゆとりの日」を記入するようにして、職員室の電話対応を17時に終わることなどについて、広く理解を求めている。そのことに反対するご意見等も聞かれず、一定の理解を得ていると考えている。</p> <p>・上記のように「ゆとりの日」の設定は予定通りおこなっており、教職員の超過勤務も昨年度から引き続き減少傾向にあるが、「年次休暇を10日以上取得する教職員の割合を60%以上にする」という点は簡単には達成できないようである。10月末時点で、すでに10日以上年次休暇を取得している教職員は、まだ14.7%で</p>

ある。現在、5～9日の年次休暇を取得している教職員がすべて10日以上を取得したとして、ようやく60％に達するので、達成するのは厳しいと思われる。ただ、夏季休暇や休日出勤の振替休日など、年次休暇以外の休暇や育児時間を取得する教職員も多く、欠員が多かった昨年度のように「休みたくても休めない」という、追いつめられるような感覚は大幅に減少したといえそうである。

#### 次年度への改善点

※最終評価にて総括する。